# 「神の国の宴会への招き」

2023年08月31日

「僕は帰って、このことを主人に報告した。すると、家の主人は怒って、僕に言った。『急いで、町の大道りや路地へ出て行き、貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人をここに連れて来なさい。』やがて、僕が、『ご主人様、仰せのとおりにいたしましたが、まだ席があります』と言うと、主人は言った。『街道や農地に出て行って、無理にでも人々を連れて来て、この家をいっぱいにしてくれ。言っておくが、あの招かれた人たちの中で、私の食事を味わう者は一人もいない。』」（ルカ14：21～24）

主イエスは、招待を受けた時には、末席に座りなさい、高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められるからだと言われた。また、食事会を催す時には、お返しのできる人ではなく、お返しのできない貧しい人、体の不自由な人を招きなさい、そうすれば、復活する時、幸いな者として報われるからだと言われた。主イエスの言葉は、社会的儀礼や常識ではなく、終末時に、神の国に招かれて食事に与る者の幸いを告げたのである。

主イエスの言葉の真意を受け止めた客の一人が、「神の国で食事をする人は、なんと幸いなことでしょう」と言った。彼は、神の国で食事することに憧れを持っていたのである。すると、主イエスは譬えを語り始めた。ある人が盛大な宴会を催そうとして、大勢の人を招いた。宴会の準備ができたので、僕を送り、「もう準備ができましたので、お出かけください」と言わせた。ところが、招いておいた人たちは皆、一様に断った。最初の人は「畑を買ったので、見に行かねばなりません。どうか、失礼させてください」と言った。他の人は「牛を五対買ったので、それを調べに行くところです。どうか、失礼させてください」と言った。畑や牛の財産を取得したので、確認をしなければならないと断った。また別の人は「妻を迎えたばかりなので、行くことができません」と言った。結婚した場合、一年間、兵役を免除されていたので（申命記24：5）、断る理由になった。彼らはそれぞれの理由をつけて、丁重に宴会に行くことができないと答えた。僕は帰って来て、主人に彼らの断りの理由を述べ、辞退したと報告した。すると、主人は怒って、僕に「急いで、町の大道りや路地へ出て行き、貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人をここに連れて来なさい」と命じた。宴席には、貧しい人や体の不自由な人が招かれた。しかし僕は、まだ空席があったので、「ご主人様、仰せのとおりにいたしましたが、まだ席があります」と報告した。主人は、「街道や農地へ出て行って、無理にでも人々を連れて来て、この家をいっぱいにしてくれ」と命じた。街道には異邦人がおり、農地には物乞いする人々がいた。彼らも連れて来なさいと言われた。著者ルカは、最後に招かれた人々の中には異邦人がいたことを言及している。宴会は、世の中からは捨てられたような人々、神から遠いと思われていた異邦人で満たされた。そして主人は、「言っておくが、あの招かれた人たちの中で、私の食事を味わう者は一人もいない」と言った。

この譬えの主人は神で、宴会は神の国の祝宴である。神の国の祝宴には本来、ユダヤ人が招かれているが、彼らは自分に都合のいい理由をつけて、招きを受け入れようとしなかった。彼らの都合とは、神の恵みより、自分たちが創り上げた律法による管理差別社会を守り抜くことで、主イエスの説く福音に反発し、激しく拒否した。ところが、社会的無失格者や異邦人に神の国の祝宴の喜びが伝わり、彼らが集まってきた。これは、主イエスの宣教時代から、そうであり、初代教会においても同じであった。